

A-2 東南アジアの大国

011. 東南アジアとは

世界有数の大国であるインドネシアはアジア大陸とオーストラリア大陸の間に掛け橋のように存在する島国であり両大陸のどちらにも属するが、インドネシアの本体はアジア大陸の中の東南アジアにある。

東南アジアという用語は世界的には第二次世界大戦後使われるようになった比較的新しい言葉である。今日では地理的区分として国際的認知を得ているが、ヨーロッパから見た方向感覚にすぎない。第二次世界大戦以前は日本では“南方”と言い習わしてきた地域であるが、1919年の教科書に既に“東南アジア”という用語が使用されていたらしい。

東南アジアは文化的には〈インド文化〉と〈中国文化〉のあい接するところであるが、基層としてインド文化が優位である。中国が文化的に優位な地区はベトナムだけである。しかし19世紀以降は華僑の東南アジア進出は目覚ましく、中国は華僑の経済活動を通して東南アジアを掌中に収めた。

東南アジアは豊かさや異文化に寛容であったことが西欧の進出を招き、タイを除くすべての国が18世紀にヨーロッパ諸国の植民地になるという不幸な歴史を経ている。イギリス、フランス、オランダ、スペイン、ポルトガル、アメリカの各国は植民地に対して宗主国として政治的強制を伴った西洋文化をもたらした。

また、植民地からの解放時の宗主国との関係はその後の国の在り方として、インドネシアのようにオランダから武力で独立を勝ち取った国とマレーシアのようにイギリスから穏便に独立を得た場合とでは、国民意識に顕著な差が生じている。

全般として東南アジアの風土はモンスーン気候の多雨・多湿のもとにあり、稲作の農耕文明が発達した。人種はモンゴロイド(→567)に束ねられる。宗教は仏教、ヒンドゥー教、イスラム教、さらにキリスト教と世界の有力宗教が拮抗しているが、宗教の基層には東南アジア独特の精霊信仰(→697)が色濃く残存している。



ベトナムのドンソン(Dongson)遺跡での1924-30年の発掘調査で銅鼓をはじめ青銅器、鉄器、石器が発見された。紀元前数世紀に遡ると見られる遺物には独特の様式があり、ドンソン文化¹と称され、広く中国南部から東南アジアに広がっている。ドンソン文化の栄華ともいべき銅鼓が小スンダ列島のスンバワ島、サンゲアン島、ロティ島、アロル島、オーストラリアを目前にしたタンニバル島までインドネシア各地から発見された。

ドンソン文化は中国文明の影響下にあるが、東南アジアでの変容も見られる。東南アジアは多様であるが、地域としての共通性もある。インドネシアは東南アジアというフィルターを通して理解されねばならない。

¹ドンソン様式の銅鼓が東南アジアへ伝播されたと同じ頃に東北アジアの日本では銅鐸が製造された。銅鼓と銅鐸の両者は青銅器であり、儀式などの使用目的などに共通するところが多い。ジャカルタの博物館に展示してあるのはサンゲアン島出土のものである。〈編者註〉この脚注にある銅鼓がこのページの写真のものである。2011/7/16 編者撮影。

012. ASEANの要

アセアン=ASEAN (Association of South-East Asian Nations) は 1967 年に自然発生的な地域経済機構として発足した。当初の参加国はインドネシア、マレーシア、タイ、フィリピン、シンガポールの 5 国で発足したが、1984 年にブルネイが加わり、6 国で自由主義陣営に属する国々であった。

インドネシアはASEANの成立に深く関わっている。スカルノ大統領時代には独自の容共外交路線でマレーシア問題(→462)が生じた。英国植民地もしくは保護国であったシンガポールとサラワク、サバ、ブルネイがマラヤ連邦と合併してマレーシアという国を造るという構想にスカルノ大統領は強硬に反対した。

マレーシア構想に対抗してフィリピンによってマフィリンド(MAPHILINDO)構想も打ち上げられた。要はマレー系民族(→563)のひろがる東南アジアの島嶼部にどのような形の政治結束を行うかという問題であった。

現在、東南アジア島嶼部はインドネシア、マレーシア、フィリピン、シンガポール、ブルネイという国に分かれたが、これらの地域はマレー系民族の地であるという共通項がある。スカルノ大統領時代はマレーシア、シンガポールなどの近隣国との外交関係がこじれたが、スハルト大統領になって構築された国際地域協力がASEANである。

インドネシア、マレーシア、フィリピン、ブルネイの4ヶ国はマレー人系国家であり、タイ、シンガポールも国内にかなりのマレー系住民を擁していることがASEANの民族的共通基盤である。

ASEANの旧6カ国の中ではインドネシアの一人当たり国民所得は最も貧しいが、国全体としての総生産力、軍事力は第一人者であり、人口はASEAN旧6カ国の 40%を占める。インドネシアはASEANの最有力メンバーである。ASEANの^{かなめ}要はインドネシアであり、事務局もジャカルタにある。

東南アジアの経済発展は世界の矚目するところとなり、地域協力として自然な形で始まったASEANは、次第に活発化し存在自体が政治的にも重要性を増すようになった。加盟各国はナショナリズムを貫きながらASEANの結束をとおして世界において確かな位置付けを占めている。

内戦の続いていたカンボジアに和平をもたらしたのは、スハルト大統領の威信によるものである。東南アジア地域の安定を東南アジア内部の問題として解決した。

ASEANはその後、ベトナム、ラオス、ミャンマーを加え、1999年にカンボジアが参加して東南アジア全10カ国になり、“ASEAN10”といわれる。

日本、アメリカ、オーストラリア、ニュージーランド、カナダの首脳とEC委員長にASEAN拡大会議のメンバーとして出席招請があり、さらに韓国、中国、ロシア、インドにも拡大されて、東南アジアが世界におけるパワー・ポリティックスの一つの極になっている。⇒460.ASEANの隆盛

013. 東南アジア島嶼部

東南アジアが包含する地域はインドシナ半島の《大陸部》と太平洋・インド洋の間の《^{とうしよ}島嶼部》に大別される。

10ヶ国の具体的の国名では大陸部としてベトナム、ラオス、カンボジア、タイ、ミャンマー(ビルマ)であり、島嶼部はマレーシア、シンガポール、インドネシア、ブルネイ、フィリピンの国々である。マレーシアの本国であるマレー半島はクラ地峡によってアジア大陸に繋がっている半島であるが、実質は島同然であるから島嶼部に分類される。

島嶼部と大陸部では風土の違いがある。高緯度に位置する大陸部はモンスーン気候であるのに対して、低緯度の島嶼部は熱帯雨林気候(→002)が支配的である。

東南アジア島嶼部の住民はマレー系民族として総括される。オーストロネシア語族(→563)と言う共通の語族である。これに対して大陸部はチベット・ビルマ系、カム・タイ語系、オーストロ・アジア語系が混在している。ただし、シンガポールは特殊な事情によって成立した人造国家であり、マレー人の海に浮かぶ孤島にも例えられるように民族的には特殊な国家である。

そもそも東南アジア多島海には国境はなく、むしろ海が人と人をつなぎ、マレー文化が共通している。東南アジア多島海のある穏やかな海は陸よりはるかに便利な文化交流の通路であった。東南アジア多島海の民族はオーストロネシア語族として文化基盤において共通しており、緩やかな一つの経済圏をなしていた。

たまたまヨーロッパ諸国の植民地支配という歴史を経た間に植民地別に政治、経済システムが別々になった。インドネシアでは植民地政庁下のKPM(王立船舶会社)による島々への航路は網の目のように張り巡らされ、東南アジア海域社会のオランダ支配というブロック化をもたらした。他の植民地も同じである。

この結果、フィリピン、マレーシア、シンガポール、ブルネイと別の国になっただけである。植民地体制を引きずる形での国家の成立は自己主張として国境に固執するようになり、自由な交流を阻害しているのが現実である。

「オランダ領東インド」はインドネシアとして独立したが、独立前の民族主義者の論戦にはマレー半島、フィリピンも含めてインドネシアという言葉があった。ヨーロッパ人による分断以前の東南アジア島嶼部を統合して独立する思想があったが、理想論として排除され、植民地の枠組みを引き継ぐ現実論の結果がインドネシアである。

スカルノ大統領はマレーシア構想(→462)を英国帝国主義者の陰謀として口を極めて罵った。ヨーロッパの植民地時代に帝国主義者が東南アジア島嶼部に勝手に引いた縄張り線を、再び自分等の都合で組み替えて固定化しようとする企てへの怒りであった。

『マレーシア・コンフロンタシ²』を怒号するスカルノ大統領の潜在意識には東南アジア島嶼部を統合した大インドネシア構想があったはずである。

014. ヌサンタラ

インドネシアの国名のインドネシア(Indonesia)の語源は「India と nesos(島)」の合成語で「インドの島々」と言う意味のギリシア語源のヨーロッパ語である。ポリネシア、マイクロネシア、メラネシア、マレーシアと同じで、この言い方によると日本は「ヤポネシア」である。

独立前、今のインドネシアの地域は「Dutch East Indies=オランダ領東インド(日本語では縮めて「蘭印）」とよばれていた。

オランダの植民地支配以前にこの地域に統一国家があったわけではない。一時、スリウィジャヤ王国(→

²スカルノ体制において当初の「マレーシア粉砕(Ganjang Malaysia)」のスローガンは、「マレーシア対決(Konfrontasi)」にエスカレートした。粉砕より対決が厳しいというニュアンスは日本語では難しい。

255)、マジヤパヒト王国(→248)の勢力は今のインドネシアに相当する範囲まで広がったが、その支配の実態は“朝貢”を強要する通商覇権のようである。

インドネシア独立の際に〈大インドネシア〉と〈小インドネシア〉が議論されたことがある。大インドネシアとはオランダ領のみならず、現在のマレーシアである英国領、米領のフィリピンを含めた東南アジア島嶼部を包括した独立国家である。

結果的に実現したのは小インドネシアでオランダの植民地支配の領域である。独立国家としてオランダ植民地を直接に引継ぐ「東インド(→272)」という名称が忌避され、民族主義者はインドネシアという国名に熱情を傾けた。しかし結果として国名にインドネシアというヨーロッパ語を選ばざるを得なかったことに西欧の影響がうかがわれる。

インドネシアに代る名称として、あえて使用されるインドネシア語に「ヌサンタラ(Nusantara)」がある。語源は「Nusa=島」、「antara=～の間」であるように「群島」の意味である。インドネシアの独立国と定着とともにヌサンタラも併せて頻用されるようになった。インドネシア(マレー)語の島はプラウ(pulau)であり、ヌサはジャワ・バリ語起源のようである。

ヌサンタラには日本語の『秋津島(あきつしま)』とか『大八州(おおやしま)』といった情感的語感がある。テレビの中央ニュースは「ヌサンタラ・ニュース」である。首都ジャカルタの中心地の近代ビルは「ヌサンタラ・ビル」であるように、ヌサンタラは多用され、また、ヌサンタラと名の付く企業は数多い。「インドネシア」が外来語の大風呂敷であるのに対して「ヌサンタラ」は在来語であり国土の実態である。

セイロンがスリランカになり、ビルマがミャンマーというように植民地時代の地域名を引き継ぐ国名は改名された。インドネシアで国粋派が勢力を得てくればヌサンタラへの改名の論議もあるかもしれない。

しかしインドネシアという国名の選択はインドネシア人自身によるもので、『インドネシア』という用語自体が民族意識の昂揚によるナショナル・アイデンティティ確立の歴史であったこと、独立以来半世紀以上のインドネシアとして存在した事実の重さから国名の改名はありえないであろう。

⇒290.インドネシアの発見

015. 島嶼国家

インドネシアは《アジア大陸》と《オーストラリア大陸》の間に広がる島嶼国家でありその島の公式数値は【17,508】である。以前の【13,667】から急増した。別に新たに領土が増えたのではなく数え直しただけである。うち、人の住む島は3000である。名前のある島は5692であるのでスハルト大統領が全部の島に名前をつけると命じたが、膨大な作業なので進展していない。

そもそも島の数はあまり意味がない。島の定義が異なれば比較はナンセンスである。日本で例えれば関西空港、琵琶湖の竹生島の存在である。日本の島の数も3000、4570、6800など数値がある。まだあるかもしれない。島と言ってもカリマンタン(ボルネオ)、スマトラ、イリアン(ニューギニア)の各々の島は一島だけで日本の総面積を上回る大きさである。

インドネシアの諸島は地理学では「スンダ列島」といわれる。さらにスンダ大陸棚(→016)にあるスマトラ島、ジャワ島、ボルネオ島の大きな島々を〈大スンダ列島〉、バリ島から東に点々と連なる島々を〈小スンダ列島〉と分けていう。

オランダ植民地時代これらの列島を“オランダ女王のエメラルドの首飾り”と修辞した。当時の気のきいた

台詞も今となつては植民地帝国主義の傲慢の残片である。“エメラルドの首飾り”との比喩を最初に表したのはミュルタテリ著のマックス・ハーフェール(→970)であり、植民地批判の書であったことは歴史の皮肉である。スカルノ大統領はインドネシア独立を“黄金の橋”を渡ると準えた。

世界の島嶼国家には日本、英国、スリランカ、アイスランド、ニュージーランド、フィリピン、カリブ海の諸国、南太平洋の諸国がある。

この中でもインドネシア、日本、スリランカ、英国など島国の共通点は大陸から程遠からぬ島嶼国家である。これらの国では大陸と不即不離の関係で独自の島嶼文化を形成した。島国故の共通性と特殊性は何であろうか。考えてみると面白そうであるが、本著では日本との共通性(→589)の考察のみに留めた。

ところでインドネシアには1万以上の無人島がある。ここで政府は無人島を金にすることを考えた。外国人に無人島をリース³ことである。20年契約で1島 100 万ドルから 1000 万ドルの幅がある。計算すると年間 5～50 万ドルの料金の1島全部を借り切りにできることになる。

富裕な外国人が島のオーナーになって別荘を建てることを期待している。環境への配慮から 70%は現状維持として開発部分として 30%の利用しか認めないということである。とりあえず 2000 島がリストに上がっている。

ジャカルタ沖のプラウ・スリプ(→042)の比較的大きな島は観光資本によって開発されているが、小さな島はジャカルタの金持ちが島ごと所有してバンガロー風の別荘を建てて優雅に週末を過ごしている。

016. スンダ棚とサフル棚

インドネシアは多くの島々からなるが、その領土の 60%にあたるスマトラ島、カリマンタン島、ジャワ島という大きな島はアジア大陸から張り出したユーラシア・プレートの上にある。南シナ海から南に広がる大きな大陸棚は「スンダ(Sunda)棚」であり、2万年前の氷河期に海面が低下した頃はアジア大陸と地続きであった。そこには「スンダランド」といわれる広大な陸地が広がっていた。

地続きの頃、大陸から動物の移住してきた。氷河期が終わり海が侵食して虎や象や犀などの大型哺乳類は島に孤立した。孤立ゆえに固有の種となったものが多い。ジャワ海は現在の水深も数十メートルと浅く、かつて陸地であった頃の河川の跡が海底に残っている。

スマトラ島、カリマンタン島、ジャワ島を主要国土とするインドネシアがアジア大陸の周辺部であることは《人文地理学》の観点のみならず、《地球物理学》においても紛れもない事実である。

元スンダランドの陸地で現在は海であるジャワ海(→036)はスマトラ島、カリマンタン島、ジャワ島に囲まれたインドネシア内海であるが、南シナ海(→040)については豊富な水産、鉱物資源を意識して取り囲む国々の罅^{つば}迫り合いが盛んである。そこでは中国の存在が大きく東南アジア諸国にのしかかっている。インドネシアは南シナ海に面していないが、ナツナ諸島という飛び地が南シナ海にあり、この周辺の海域に膨大な天然ガスの埋蔵量がある。

一方、ニューギニア島とオーストラリア大陸との間のトレス海峡においても氷河期は地続きであった。「サフル(Sahul)棚」にあるニューギニア島はオーストラリア大陸とともに「サフルランド」といわれ、大陸移動により北へ漂流して現在位置にある。

³島の外国へのリースについては国粋派から国土を売り渡すものだという批判(FinancialReviewMay62000)がある。

オーストラリア大陸(サフルランド)は Gondwana 大陸⁴からの分離時期が最も早かったため有袋類など特異な進化をとげた固有の動物が存在する。ニューギニア島もオーストラリア大陸系の動物の領域である。

地球の表面は十数個のプレートによって敷き詰められており、これらのプレートは水平運動を行っている。プレート同士の接触面では分離したり重なったりし、その運動から地震や火山活動が起きる。大陸でさえ移動する。プレートテクトニクスの理論⁵である。

スンダランドとサフルランドは接近したが、陸地の本体が接することはなかった。しかし付属する島々同士が接触し一つの島になったのがスラウェシ島(→197)である。スンダランドとサフルランドの中間地帯はウォーレスシア(→039)といわれる両者の移行地帯であり、深い海とスラウェシ島など複雑な地形の島が存在している。

プレートテクトニクスの地球の歴史から見れば人類の歴史は物差しの目盛が異なる長さである。人類はプレートテクトニクスに関係なく移動してきた。たまたまインドネシアではスンダランドにマレー系民族(→563)が陣取り、サフルランドにパプア系民族(→626)が陣取っているのは偶然にすぎない。

017. オセアニアの国として

インドネシアが社会学、政治学の観点から一義的に東南アジアの国に属することは明らかであるが、地理学的、民族学的観点からインドネシアは全て東南アジアと割り切るわけにはいかない。何故ならニューギニア島の西半分はインドネシア領土のパプア州であるが、その民族、文化は東南アジアとは全く異質のものである。

1970年の万国博覧会敷地の跡地である千里の万博公園に国立民族学博物館がある。同博物館は国家の枠を超えたグローバルな視点から地球上の民族を見るものである。梅棹忠夫氏の執念の結実であり、大阪の有数の文化施設である。

民族学博物館にはインドネシアの民族に関する展示も多くあり、東南アジア室の展示においてインドネシアは主要な位置づけにある。しかし同博物館編纂の「民族学」の検索ではインドネシアはオセアニアに所属している。インドネシアの所属区分は扱いが難しい。

オセアニアは大洋州ともいわれ太平洋のマイクロネシア、ポリネシア、メラネシア、オーストラリア大陸、ニューギニア島、ニュージーランドなどの総称である。要するにインドネシアはアジアとオセアニアの両方にまたがる大国である。ロシアとトルコがヨーロッパとアジアにまたがるのと同じ関係である。

ニューギニア島のパプア州はオセアニア世界であり、スマトラ島やジャワ島は東南アジア世界そのものである。インドネシア国内に東南アジア世界とオセアニア世界があるが、両世界はある境界線でもって切り替わるものではない。

生物学から見るとサフルランドとスンダランドの中間にあるスラウェシ島、小スンダ列島、マルク諸島は、アジア大陸とオーストラリア大陸の両大陸の混在が見られる。1928年、デイッカーソンは生物学で見られる移行地帯の島々をウォーレスシア(Wallacea)、またはワラッカラインと呼ぶことを提唱した。

⁴Gondwana (Gondwana) 大陸は、プレートテクトニクスにおいて、過去に存在したと考えられている超大陸。現在のアフリカ大陸、南アメリカ大陸、インド亜大陸、南極大陸、オーストラリア大陸や、アラビア半島、マダガスカル島を含んだ大きな大陸であった。

⁵プレートテクトニクスの理論はヴェーゲーナーによって1915年に提唱されたが、学会で受け入れられたのは1967年以降である。大陸や大洋底の相互の位置の変動をプレートの動きとして理解する学問。この理論により大地形や地震、火山、海溝などの諸現象を統一的に理解できる。

人間は船によって海をこえることができるので島伝いに移住した。しかしウォーレシアのコンセプトは人文科学にも適用できる概念である。ウォーレシアでは民族もマレー系とパプア系が混在しながら東にすすむほどパプア系が濃厚になる。西の《稲と水牛》に対し、東は《イモと豚》である。これも混在しながら推移していく。

南太平洋はイースター島のモアイ像のごとく巨石文化が広がる地域である。インドネシアの各地には謎の巨石文化(→700)が残存している。また、インドネシアはオセアニアでもパプア系とは別のポリネシア系の太平洋文化圏の要素も持つ。

スラウェシ島のブギス人(→617)は太平洋やインド洋にも航跡をのぼす海洋民族である。航海技術に勝れたポリネシア人と同じ血であろう。一般に小柄なインドネシア人の中に高見山関や曙関のようなポリネシア的巨漢もみかける。

感覚的にはインドネシアの 4/5 は東南アジアであるが、1/5 はオセアニアであり両世界の^{くさび}楔となる国である。

⇒234.新パプア州

018. 国土面積

インドネシアは大国である。2億を超える人口(→722)は中国、インド、アメリカに次ぐ世界第4位である。かつての5位から繰り上がったのはソ連が解体したからである。

人口に対して面積も相当なもので 192 万 k m²である。インドネシアの国土は赤道上に広がっている。面積は日本の約5倍である。しかし世界でインドネシアの面積を上回る国は 14 カ国⁶⁾に達する。人口密度は相対的に高い部類に入る。

北緯 6.08 度、南緯 11.15 度で南北の幅 1900km に対して、東西は東経 94.45 度から 141.05 度と長くその延長は 5100km になる。赤道の総延長は 4 万 km であるからインドネシアは赤道の 1/8 強を占める。

インドネシアの国土の大きさが実際より過小評価される傾向があるのは地図にも原因がある。方角重視のメルカトル図法は赤道から離れて緯度が高くなるほど相対的に大きく表されることである。特に日本とインドネシアは同経度線上になるため同一地図の上下に表されることが多くメルカトル図法の影響をもろに受ける。

島の形も錯覚の要因である。例えば日本の全国土面積もインドネシアで三番目の大きさのスマトラ島にも及ばない。しかし同縮尺の日本全土とスマトラ島の地図を並べると日本の方が大きく見える。丸くまとまった島(スマトラ島)は細長く複雑な島(日本列島)より小さく見えるのは錯覚^{きつぱく}である。スマトラ島が日本列島より大きいことを方眼紙に白地図を写し取ってようやく納得した人がいる。

インドネシアは領土については陸地のみならず海域において群島理論(→030)による領土を主張している。その主張によれば国土面積は 790 万 k m²で海域が 81%を占める。

面積のみならず海岸線の長さは国土付与の大きなファクターであり、単調な海岸線に対して長い海岸線は天の恵みである。島の多いインドネシアの海岸線の総延長はカナダについて世界第2位⁸⁾である。

⁶⁾①インドネシアより国土面積の広い 14 カ国は、ロシア、カナダ、中国、アメリカ、ブラジル、オーストラリア、インド、アルゼンチン、スーダン、アルジェリア、ザイール、サウジアラビア、カザフスタン、メキシコである。

⁷⁾海域を含めた面積の数値は 980 万 k m²という数字もある。

⁸⁾1 位カナダは 202,080km、2 位インドネシアは 54,716km、第 3 位グリーンランド、第 4 位ロシア、第 5 位フィリピンに続いて、日本は 29,751km で世界第 6 位であり、オーストラリア、中国、米国に勝っている。日本は資源のない小国であるという卑下意識があるが、経済水域面積、海岸線からは有数の大国である。ついでに日本の陸地面積は山岳部が多く平地が少ないことが

ところで国内に3つの時間帯をもつインドネシア東西 5000 kmの拡がり⁹はアメリカの【サンフランシスコ⇄ニューヨーク】と同じであり、ヨーロッパに置き換えると【モスクワ⇄マドリッド】に相当し、全ヨーロッパが覆われる。

ヨーロッパには数多く民族がおり主要な民族毎に各々の国がある。これらの国々は人種的にはコーカソイド(白色人種)であり、言葉もインド・ヨーロッパ語族が主流である。

民族国家はヨーロッパで始まり世界に広まった。しかし民族国家は欠点もある。民族問題でチェコスロバキアは分裂し、ユーゴスラビアは憎悪がぶつかりあう戦争を行っている。民族問題は世界各地で癒しがたい生傷を晒している。

ヨーロッパ自身でも国境を廃してEUへの統合化が進められており、2002年に通貨統合の実現したEUの行き着くところとしてインドネシアのイメージが重なる。インドネシアという多様な民族からなる人造国家はEUに統合されたヨーロッパの理想像を一步先に実現したものといえないだろうか。

019. ジャワ島と外島

面積 13 万 k m²のジャワ¹⁰島は島国インドネシアの中では面積では5番目の大きさの島であり、全インドネシア陸地面積の7%にすぎない。しかしジャワ島は人口では60%強をも占め、インドネシアの政治、経済、文化の中心である。また、首都ジャカルタの存在地であり、ジャワ島はインドネシアを代表している。

《ジャワ島》に対して外島(luar pulau 外側の島)はジャワ島以外の島々を指す用語である。《外島》という言葉には面積的には十倍以上のジャワ島以外を十把一絡げに一括するジャワ島中心主義がみられる。「外領」も外島と同じ意味で使用される。

ジャワの古名がジャワウト(粟を産する島)といわれるように東南アジア島嶼部の中でジャワ島は他を圧倒する豊穡の島¹¹であった。地球上の赤道周辺を見回すにアフリカにしる南米にしる人口過疎地域であり、ひとりジャワ島のみがその例外である。

「タナ・ジョウオ」は「ジャワの地」というジャワ人の誇りの意味のジャワ語であり、タナ・ジョウオの豊穡さの所以は火山性の土壌(→023)である。豊穡なジャワの大地は米の生産地であった。外島は自らの資源をジャワ島の米と交換するという形でジャワ島に繋がっていた。クディリ王国(→245)やマジヤパヒト王国(→248)の外島支配は米の支配であったといえよう。

ジャワ島を中心とする米の支配関係はオランダの植民地統治によってより明確になった。熱帯作物の商業生産のため植民地資本は外島へ進出しプランテーション(→505)を起こした。ジャワ島を本拠地としてバタビヤ政庁を置き、ジャワから米を配ることによってオランダ領東インドの植民地支配は揺るぎなきものであった。

独立後、ジャワ島の米の移出余力は低下し、一方で外島での米の生産力は増加して米によるジャワ島の外島支配図式は揺らいだ。石油、森林の資源を有する外島が外貨の稼ぎ手であり、ジャワ島と外島の勢力

ハンディとされるが、山岳部が多いことは陸の容積が大きいことで、しかも山岳部の複雑な地形は陸の表面積が大きいことである。日本は非常に恵まれた地形の国であるという評価があってもよいと思う。

⁹ジャカルタ・大阪間の距離は5000kmである。即ちインドネシアの東西の拡がりを南北の距離感覚に置き換えればインドネシアの国土の大きさが実感できる。

¹⁰ジャワのローマ字表示はJawaとJavaがある。Jawaがインドネシアの公式表示であるが、欧米ではJavaが汎用されジャワ人はJavaneseである。ただしインターネット検索でのJavaはIT用語が圧倒的である。

¹¹西洋では紀元前150年のプトレマイオスの地理書に“豊穡の地”としてJabadiou(ジャワ島)が紹介されている。ラーマーヤナでは金銀豊かな7王国からなるヤバ・デヴィパ島と記されている。ジャワ島とスマトラ島が混同されているふしもある。

関係¹²に変化が生じた。

しかしながらジャワ人がインドネシアにおける人口の大半を占めており良きに付け悪きにつけインドネシアの主導民族としての役割を果たしてきた。インドネシア共和国になってもジャワ島と外島という疑似支配関係だけはそのまま引き継がれ、外島の資源をジャワ島が支配している実態がある。

インドネシア人としてジャワ人と外島人の融合がインドネシアという国家のレーゾン・デートル(存在理由)であった。しかし、現実にはオランダ人の後釜にジャワ人が居座っているかのようである。

スマトラ島出身者はハッタ副大統領(→443)が辞任した時からインドネシアは“大ジャワ”になった、と捨て科白まりふをはく。スラウェシ島出身者はハビビ大統領(→454)という優れた大統領をスラウェシ島出身者というだけでジャワ人が結束して再選を拒んだ、と思っている。

ジャワ島と外島との間の引力と反発関係は親近関係にも憎悪関係にもなりうる。インドネシアの宿命である。
⇒438.資源帰属の思惑

¹²ジャワ島と外島の人口比は6:4でジャワ島が上回る。しかし選挙で選ばれる国会議員の数は建国以来現在まで両者がほぼ均衡するように配分されている。この結果、外島で有力な政党は国全体の総得票数の割には議員数が多くなる。国民協議会においても各州に各5名の割当枠があることは外島が有利である。